

社会的自己概念の中央集権的・地方分権的力学の 神経基盤の解明

[1] 組織

代表者：溝上 慎一（京都大学高等教育研究開発
推進センター）

対応者：杉浦 元亮（東北大学加齢医学研究所）

分担者：

杉浦 元亮（東北大学加齢医学研究所）

野内 類（東北大学スマートエイジング
国際共同研究センター）

研究費：物件費 13 万 8 千円、旅費 6 万 2 千円

[2] 研究経過

社会的自己概念すなわち「社会における自己のあり方の理想と現実」についての意識・認識は、成人の社会行動においては生き方全体を規定する重要な因子である。人間の精神的な成熟や加齢を理解し、高齢化社会がもたらす諸問題、特にその社会的な側面への科学的な処方箋を提案するためには、社会的自己概念の科学的な理解が不可欠である。しかし、社会的自己概念の生物学的な基盤についてはこれまでほとんど研究が行われていない。

近年の自己心理学研究は、社会的自己の多数性（「研究者としての自己」「夫としての自己」「父親としての自己」等）に注目している。これらの多数的自己（multiple selves）は意識される客体的な自己（客我=me）であるが、これらと意識する主体としての自己（I）との関わり（力学）については、現在大きく分けて2つの立場がある。一つは中央集権（centralization）的力学、すなわち主体的自己（I）を前提に多数的自己が分化するという William James 以来の古典的な立場である。もう一つは、H. Hermans らの対話的自己論（Hermans & Kempen, 1993; Hermans & Hermans-Konopka, 2010）に代表される地方分権（decentralization）的力学で、主体は多数的自己のいずれかの客我にポジショニングすることではじめて意識化されるという立場である。

本研究の目的は、社会的自己概念における中央集権的力学と地方分権的力学の関係を神経基盤の視点

から解明することである。

以下に研究活動状況の概要を記す。

このテーマに切り込む端緒として、本年度は中央集権的力学と地方分権的力学をそれぞれ反映すると考えられるポジショニングの課題操作を実験として行った。一般一個別水準を往還するポジショニング操作によって、自尊心や自己・私へのイメージが変化するようであれば、そのとき、人は地方分権的力学によって自己や私をとらえていると見なされる。

Rosenberg (1965) の自尊心尺度 10 項目を用いて、次の手続きによる実験をおこなった。実験群（ $n=47$ ）では、①操作なしで自尊心尺度に回答する（これを「一般的自己」の自尊心得点と見なす）、②重要な私（*Me*）を3つ抽出し（それぞれを私1・2・3と呼ぶ）、それぞれにポジショニングをさせ、その世界観を作らせた後、①と同様に自尊心尺度に回答する。③私1・2・3それぞれのポジションにおける自尊心得点（たとえば、私1 [28点]、私2 [34点]、私3 [30点]）を、高いほうから並び替えて私A・B・Cと表記する（私A [34点]、私B [30点]、私C [28点]）（重要な私の抽出、ポジショニングのさせ方などの実験の手続きには工夫がされているが、ここでは紙幅の関係から最低限の説明にとどめる）。他方、統制群（ $n=16$ ）では、②のポジショニングの操作を入れずに、自尊心尺度に4回続けて回答させた。

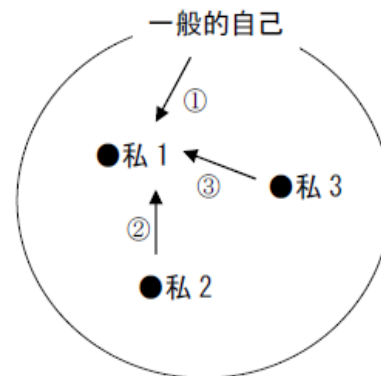


図1 ポジショニングの相違による私1のイメージ
評定

次に、図1に示すようなかたちで、ある私の（自己）イメージがポジショニングによって変わるかを検討した。つまり、①私1のイメージ：何の操作も入れずに単純に、「私1のイメージはどのようなものですか。悪い（1）——良い（7）の中でもっとも近い番号を教えてください」という教示のもと、イメージ評定をさせる。これは、一般的自己にポジショニングをした状態で私1をイメージ評定したものと見なされる（一般的自己→私1）。②ポジショニングの操作をいれて、私2のポジションから私1をイメージ評定する（私2→私1）。③同様にして、私3のポジションから私1をイメージ評定する（私3→私1）。こうして、私1のイメージは、計3種類（一般的自己・私2・私3→私1）評定されることになる。同様にして、私2・私3のイメージもそれぞれ3種類ずつ評定される。この課題は、実験群のみに与えられた。

[3] 成果

(3-1) 研究成果

本年度は、以下に示す研究成果を得た。

結果は図2のとおりで、この結果はポジショニングの操作を入れた実験群において一般的自己の自尊心得点とポジショニング操作を入れた私（Mes）の持つ自尊心得点とが異なること、言い換えれば、同じ自己世界の中でもポジショニングによって自尊心は異なることを示唆するものである。

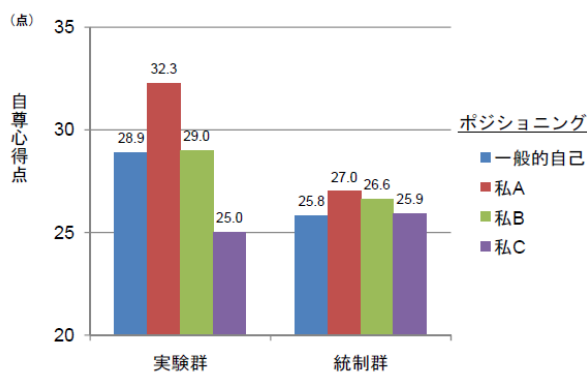


図2 実験群と統制群別に見た自尊心得点（一般的自己、私A～C）

また、同様のポジショニングによるイメージ評定についても、ポジショニングの相違によって同じ私のイメージが大きく異なる実験参加者の割合が4割認められた。

このように、自己や私の自尊心、（自己）イメージは、主体がどの観点からとらえるか、すなわち、ど

こにポジショニングしてとらえるかによって異なることがあると理解される。言い換えれば、社会的自己は地方分権的力学によって機能していると理解される。実験におけるポジショニング課題、操作についても知見が得られたので、次年度は加齢医学研究所のfMRI装置を用いて、ポジショニングの操作の神経基盤を明らかにしたい。

なお、この実験課題とその結果については、平成23年2月に加齢医学研究所にて関係者とミーティングを行い、それを受けて次年度のfMRI実験の課題を検討した。

(3-2) 波及効果と発展性など

この共同研究は、社会的自己概念の神経基盤という未開のテーマに、自己心理学者と脳科学者がタッグを組んで取り組む、画期的なプロジェクトと認識している。社会的自己概念処理の「抽象-具体性水準」を反映する脳ネットワークが明らかになれば、社会的自己概念の中央集権的力学と地方分権的力学について神経科学的な説明が可能になる。また、この脳ネットワークの活動を指標として、様々な社会的自己概念処理においてどちらの力学が働いているのかを明らかにしたり、様々な世代において社会的自己概念の発達・成熟の程度や健全性を測定したり、といった研究の展開が可能になり、本研究の大計画も次のステップに進むことができる。現代人の社会的自己概念に関して、自己の全体性の意義の再検討や、そもそも人がなぜ自己の全体性を求めるのかという進化発達の問いも可能であろう。今回の研究結果の予想は難しいが、より具体性の高い自己にポジショニングした場合、自伝的記憶想起に関わることが知られる側頭葉内側や前頭葉内側、内外側の頭頂・側頭連合野が関与する可能性が想定される。これらの領域の自伝的記憶想起における役割は未だ明確に解明されていないので、本研究の成果は自伝的記憶想起の神経基盤研究にも有用な知見をもたらすかもしれない。

[4] 成果資料

平成23年度は研究成果をまだ発表していない。